

◆「ごきげんいかが」の二月十六日に詠っている猫について。三十年ほど前、宮城県登米市に晩年を過ごす老親を、折々訪ねていました。いつの頃からか白い野良猫が父母の家の広い庭に姿を見せていました。父が言うには、広い屋敷周りには何匹もの野良猫が現れていて、白猫を虐める大きい猫を父が追い払ってやったとのこと。盆に帰った時一度私が残飯を与えたら、次の日鼠を銜えてきて、前の日餌をもらったところに鼠を置いて座ったのです。その姿は、昨日のお礼と今日もくれという様子でした。数日後、山形に帰る私を父母が見送っていると、白猫は何処からともなく現れて父母の後方に座って見送っていました。この金色と青の目をした猫はオッドアイといい、幸運を呼ぶ神祕の目と言われるとのことです。忘れ得ぬ美しい白猫でした。

梅津純子

◆一日の朝、家事（洗濯やごみ出し）のあとの散歩が大事になっている。日中の（夜も多く）一人暮し、それで、少ない外出の機会にもなる。コースはその日次第、天気情報が必要、冬晴れの日がつづいていたが、二月下旬になって、天気が変わりやすくなった。花粉の飛散もある。趣味でもある。先回、散歩は趣味だろうか？ AIに聞いたら、その可能性がありますが、という。もう一つの

趣味、短歌ももうこの散歩中にしか詠まなくなった。一日に平均して六首程度詠む。散歩はまた花をみるためでもあって、コースもときにそのためになっている。蠟梅も十月桜も一町内に一軒程度でみることができるよう。花は、その季節を楽しむことでもある。子どもに（ときに赤ちゃんにも）あう、しる犬にあう、これも大きな楽しみ、だ。

小野澤繁雄

◆三寒四温とはよく言ったもので、立春を過ぎてから暖かくなったり寒くなったりの日が続く。娘二人はすでに嫁ぎ、しばらくお蔵入りしていた雛人形だが、女の子三人の孫に恵まれ、また飾ることにした。この飾る作業がひと苦勞。飾ろうにも人形の位置、小物の配置、まったく記憶がない。ネット頼りに一日がかりで何とか飾ってはみたが……。片付けと来年のことを思うとまたひと苦勞である。「これは右それは左と雛飾る」

神村ふじを

◆去る二月二十三日、白鷹町内で『出稼ぎの時代から』の出版を記念する集いを開いた。四年前、同タイトルの映画を仲間たちと制作した。その一時間の映画には盛り込めなかったことが多すぎるという監督の強い思いを汲んで、同じ仲間で本を作ることにした。約一年半後の昨年九月に出版することができた。自分たちで祝賀するのもおかしいので、今回「出稼ぎを語り、戦後八十年・高度経済成長から六十年を経た現代」について語ってもらおうと企画した。五十名を超える、大学生か

ら九十歳の方々の参加を得た。三十代の大学の研究者が三名おり、このマイナーなテーマに大いに
関心を持っていることを知り、とても元気づけられた。映画を観た大学生の感想文も紹介してくれ
た。現在日本にきている大勢の外国人労働者とかつての出稼ぎ者を重ねて考えている若者は少なく
ないようだ。グローバル化のただ中に置かれているのだから。六十年前の出稼ぎは過去のことでは
ないのである。

新野 祐子

